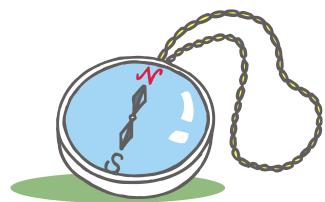


羅針盤



第 5 号

令和4年(2022年)5月9日(月)

◆『いじめについて考える日』

住吉中学校では、違いを認め合い、互いに相手を思いやる集団育成に重点をおいた教育活動を展開しています。生徒の皆さんも十分に理解していることは思いますが、「いじめは生命をもおびやかす行為であり、人間として絶対に許されない行為」です。仲間はずれ、冷やかしやからかい、誹謗中傷、・・・、自分がされて嫌なことは、誰がされても嫌なことです。「いじめ」は、絶対に許されるべきことではありません。生徒の皆さんの中でも、安全で安心して学校生活を過ごす権利を持っています。常に相手の立場に立って物事を考え、友だちが抱えもっている課題を自分の課題として捉えて、時と場合によっては、学級や学年、学校の課題として考えることが何よりも大切なことです。課題の解決に向けて、共に考え、協力し、支え合えることが大事なことです。全ての人が持つ人権を守ること、誰もが生きていく権利を有することを当たり前のことではあるけれど、今一度しっかりと振り返るとともに、考える時間を持ってもらいたいと考えています。

保護者の皆さん、「いじめ問題」に限ることなく、ご家庭で何かお困りのことがありましたら、些細なことでも構いませんので、学校の方へご相談ください。学校にできることも、確かに限界はあるとは思いますが、保護者・地域の皆さんとしっかりと手を携えて、子どもたちにとってより良い教育活動や一人ひとりの子どもたちにとって少しでも多くの支援できる活動を展開して参りたいと考えています。 (校長 坂井 伸治)



◆「時」とのつながり

明日という「不確かさ」について、今日という日の延長線上に、私たち一人ひとりが思い描いている明日という日が来るのではなく、「豊かにいきるということはどういうことなのか」ということを考え、現在・過去・未来という三つの時間を融合して一つの「時(とき)」として生きられることが重要であるという言葉を、古代ローマ時代に活躍したとされる哲学者ルキウス・アンナエウス・セネカは残しています。彼の言葉は、私たち一人ひとりに「真剣に生きよ!」と強く促しています。些細なざこざに決して振り回されることなく、自分自身の生(せい)を見つめなおし、人間はそもそも不完全な存在であるからこそ理想を追い求め、日常に引っ張られて現実的になり過ぎるのではなく、理想が照らし出す道に価値を置くべきであると、彼は考えました。

「命とは一人ひとりが持っている時間」という教えを説いた日野原重明(ひのはらしげあき)先生と同じく、セネカは単なる時間の「長さ」ではなく、「時」の「深さ」を感じとれることが大事であると考え、「時間の浪費」ほど無駄なものではなく、「時間」を節約すること、そして、その奥に潜んでいる「時」を愛(いと)おしむことが重要であると説いたのです。一度しかない自分の「時」をどのように過ごすべきなのか、サンニテグジュペリの著書『星の王子さま』のなかでも、「ものごとは、心でよく見なくては目には見えない。一番大切なことは、よく見えない」と書かれていて、この作家の思いと、セネカが警鐘した言葉とが深く繋がっているように感じずにはいられません。

